「うつぼ物語」

童話化の試み

本田和子

一月号から童話のヒントになりそうなものとして、「うつぼ物語俊蔭の巻」が関根慶子氏によって紹介されてきた。私は、毎号それを興味深く拝見していたが、今度はこれを実際に子どもに与える物語の形になおしてみるようにとの、編輯部からの御注文をいただいてしまった。

俊蔭の漂流譚はどの部分をとっても、ロマンティックな興味深い童話を成立させ得る。もちろん一号と二号に紹介されている全文をほとんどそのまま子どものことばに置き換えても面白い物語になり得るし、幾つかに分ければ各々が独立の物語としても用いられ、一連の長い物語としても楽しまれるものに作り変えることが出来よう。

私はここでは、紹介された漂流譚から二つの童話を作ることを試みた。はじめの部分をとって、年少児にも理解出来る単純な短い童話を一つ、「ふしぎな琴」の件りから年長児向きのものを一つ童話化した。私の意図するのは、私どもの祖先の残した数多くの古典から、あるいは外国の物語から、私どもの手によって優れた童話を産み出し得るということを、保育の任に当る多くのかたがたに知っていただきたいというところにある。童話作家や、再話家の手を経るまでもなく、私どもの手で作り変えていくならば、子どもたちの世界を富ます話材は私どもの周囲に限りもなく豊かであろう。ここに作ってみた二つの物語は、「これを子どもに与えよ」という意味でなく、「このように童話化することが出来る」という例として発表するものである。子どもたちに、自分にとって興味深かった、あるいは感動した物語を与えてみようと志すかたたちにとって、一つの参考ともなれば幸と思う。

としかげさんのお話

ずっと昔のお話です。あるところに、としかげさんという男の子が、お父さんやお母さんといっしょに楽しく暮しておりました。

としかげさんはお顔もとても可愛らしく、何でもよく出来て何でもよくわかる、とてもりこうな子どもでしたから、お父さんとお母さんは、それはそれはだいじに可愛がって育てました。お父さんとお母さんは、自分の手よりも足よりも、何よりもとしかげさんをだいじにしました。人間に眼がなかったら何も見えなくてそれは困りますね。眼はとてもだいじなものです。でも、お父さんとお母さんは、その大事な眼よりも、としかげさんの方をだいじに思ったくらいです。

としかげさんはすくすくと大きくなって十六才の立派な若者になりました。その時に、ちょうど天子様が日本のお国から、海を越えて、おとなりの支那のお国へ、おつかいをお出しになることになりました。学問のよく出来る、いろんなことのよくわかる人を選んで、おつかいに出しましょうということになりましたから、としかげさんも選ばれて、支那へ行かなくてはならないことになりました。

お父さんとお母さんは、何しろたった一人っ子のとしかげさんを、遠い支那のお国へ行かせるのは、心配で心配でたまりません。夕方のかえりがおそくてもあんなに心配なのに、海をわたって支那へなどやったら、いつまた会えることでしょうと、涙がこぼれてくるのでした。でも、とうとうお船の出る日がやってきて、としかげさんは皆といっしょに日本のお国をはなれました。

「お父さんお母さん、きっと元気で早くかえってきますよ。待っていて下さいね。」

「早くかえってきておくれね。」

としかげさんの乗ったお船が支那へ向かって広いひろい海を進んでいきますと、向こうの方から黒い雲がむくむくとひろがってきました。

「おやおやたいへんだ。おかしな雲が出て来たぞ。」

「風もだんだん強くなってきた。あらしになりそうだぞ。」

お船の人たちが大騒ぎをしているうちに、空一面にひろがった黒い雲からは、ものすごい雨がザアッザアッとお船の上に降ってきました。ゴウッゴウッひどい風です。ザブーンザブーンと波もお船の上までかぶさるくらいになってきました。サアたいへん、大あらしです。お船は木の葉のようにゆれて、もう支那へ向かって進むことは出来なくなってしまいました。かわいそうなとしかげさん。

でも、としかげさんのお船は沈みませんでした。どこか知らない、見たこともない所ですけれど、静かな砂浜にたどりつくことが出来たのです。でもシーンと静まりかえった砂浜に人の姿も見えませんし、一匹の鳥も、犬や猫さえもいないのです。いったい、ここはどこなのでしょう。誰も人の住んでいない所なのでしょうか。これからどうしたらよいのでしょう。

としかげさんは、すっかり悲しくなってしまいました。本当にどうしたらよいのでしょうね。

としかげさんは砂浜の上に坐って、じっとほとけ様にお願いをいたしました。「どうか、この私をおたすけ下さいませ。私に力を与えて下さいませ」と一生懸命にお祈りいたしました。

と、その時、

「ヒヒーン」と元気のよい鳴き声が聞こえました。おやおや、馬です。一匹の真白な馬が、その背中に青いあおい海の色のようなくらを置いて、ふさふさしたたてがみをふりふり、波打ちぎわをとびはねているのです。

「ヒヒーン」と元気のよい声。

そして、その馬はとしかげさんの所にかけよりました。おやおや、そして「さあお乗りなさい」というように、としかげさんにすりよってくるではありませんか。

としかげさんは馬の背中に、そっと乗ってみました。すると、まあ何とはやいこと、馬は、まるでお空を飛ぶ鳥のように軽々とかけて、アッという間に、こんもりと木のしげった涼しそうな森のそばにとしかげさんを連れていったのです。そして、としかげさんをそっとおろすと、まあどうでしょう。その真白な馬は、真白な煙のようにすーっとどこかへ消えていってしまいました。

青々と葉をのばした木のかげに、大きな虎の皮をしいて、三人のお爺さんが坐っておりました。お爺さんたちは、やさしそうな顔をして、静かに琴をひいています。

としかげさんは、そっと木のかげに立ってのぞいておりますと、一人のお爺さんが、ふとこちらを向きました。

「おやおや、あなたはいったいどなたです。」

「日本の国から参りましたとしかげという者です。」と、としかげさんが答えました。

もう一人のお爺さんが云いました。

「やれまあ、ずいぶん遠くからいらしたのですね。日本からの旅のおかたですか。たいへんだったでしょうねえ。」

もう一人のお爺さんが云いました。

「それなら、しばらく、私どもといっしょに泊っていらっしゃい。ここは静かないいところですよ。」

そして、三人のお爺さんは、もう一枚虎の皮を出して木のかげにしいて、としかげさんの坐るところをこしらえてくれました。

森の中は、ときどきやさしい風が吹いてすぎるだけで、何の物音も聞こえない静かさです。三人のお爺さんのひく琴の音は、それはそれは美しくひびきました。

「私は日本にいた時から琴が大好きでした。どうぞ私にも教えて下さいませんか。」

としかげさんのたのみを聞いて三人のお爺さんは大喜びでした。その日からとしかげさんは、三人のお爺さんの教えをよく聞いて、いろいろな美しい音楽を全部覚えてしまいましたので、すばらしい琴の上手な人となって、お父さんや、お母さんのところへかえることが出来ました。

（第一話、完）